

実践例「学習指導の充実・深化」

「課題8 地域に根ざした学習内容の改善・充実」

- 1 地域の教育環境や人的財産を生かし、地域の良さに気付かせる学習内容
- 2 地域や家庭の教育力を積極的に活用し、児童生徒の学びを豊かにする学習内容
- 3 地域内外の異校種間交流や交流学习等による新たな学習内容

I 学校名 占冠村立トマム学校（学校長 富居充孝）

II 研究の概要

- 1 研究主題「さまざまなヒト・モノ・コトに触れ、心豊かに、
自己の生き方を考え、未来を創造する子どもの育成」

2 本校の概要

本校は大正6年に落合尋常小学校トマム第一分教場として開校し、平成28年度に100年目を迎えたトマム小学校と70年目を迎えたトマム中学校の小中併置校であった。

平成29年度4月より、本当の意味で一つの学校として、義務教育学校「占冠村立トマム学校」となった。しかし、児童生徒数は昭和40年度の153名をピークに年々減少の一途をたどっている。現在は、前期課程児童数3名2学級、後期課程生徒数3名1学級となっている。（平成29年4月1日現在）

そうした状況において、児童生徒は性格も明朗・素直な子ばかりで、生き生きとした学校生活を送っている。保護者の学校教育に対する意識は高く、学校行事や安全指導・環境整備等のPTA活動に積極的に協力していただいている。

本校では、各行事の縦わりの係活動や日常の若葉会活動（児童会・生徒会活動）などを通して集団生活や仲間意識を高めるとともに、学習活動においては、少人数指導を通して基礎・基本の定着を図っている。また、体力づくりでは、休み時間の「チャレンジタイム」における縄跳び等の全校運動や全校遊びに積極的に取り組み、健やかな身体の育成に努めている。

さらに、本校は、昨年度よりコミュニティースクールとなり、これまでもまして地域と連携し、その協力を得ながら教育活動を展開し、学習活動の充実を図るとともに児童生徒の豊かな心の育成に十分な成果をあげている。

3 本校の研究～義務教育学校1年目として～

① トマム小中学校が義務教育学校に移行した理由

学校は今を生きる子どもたちにとって、現実社会との関わりの中で、毎日の生活を築き上げていく場であり、未来の社会に向けた準備段階の場である。これからの困難な時代を自分の力で乗り越える力を身に付けさせるために、そして求められている社会の要請を鑑みトマム地区の学校教育を維持し、さらに発展させることを考え、また、教育環境のさらなる整備充実のため、義務教育学校への移行に踏み切った。

② 1年目の方針～できることから始めよう！～

小学校でも、中学校でもない新しい学校種としての義務教育学校において、9年間の学習内

村内の他の小学校、中学校も参加し、雪は面倒で嫌なものと思えるのではなく、視点を変えて見ることで、その美しさ、すばらしさに気づき、占冠の自然の豊かさやよさをあらためて知ることができる活動となっている。

② 地域や家庭の教育力を積極的に活用し、児童生徒の学びを豊かにする学習内容

ア 地域の教育力を生かした活動（地域住民との連携）

- ・「山菜学習」 1年生活科、3年・6年総合的な学習の時間、8・9年生家庭科

ねらい：地域でとれる山菜にはどのようなものがあるかを知り、その調理を通して地域の食文化を理解できるようにする。

内容：本校グラウンド横（鶴川沿い）にて山菜（オオウバユリ・フキ・ウド・ヤマブドウの葉など）を採り、あくの抜き方や調理法（天ぷら・炒め物・酢の物など）、毒のある植物の見分け方などを講師から学ぶ。

学校周辺の植物環境を知る活動を通して、トマムの自然の豊かさ、生活の知恵などを地域の大人から学び、自己の生活に生かし、大切にしていこうという意欲を高めることができた。

イ 地域の教育力を生かした活動（地域住民との連携）

- ・「陶芸教室」 前期課程図工科、後期課程美術科
- ・「栽培活動」 1年生活科、3・6・8・9年総合的な学習の時間

内容：全員で収穫祭を念頭に、育てるものを決定する。自分たちの手で畑の準備をし、栽培計画を立案し、地域の方々と苗植えを行う。作物の管理（水やり・草むしり・収穫など）については、自分たちの力で実施する。

- ・「森の学校」 前期課程総合的な学習の時間（占冠村役場林業振興室との連携）

ねらい：自分たちの住んでいる村の産業を、実際に森に入り、間伐作業や植樹することなどの体験を通して理解することができるようにする。

内容：占冠にある木について、その見分け方や、林業についての講話を受けたり、占冠村の森林に直接入り、間伐作業体験を通して、森の営みについて知りつつ、占冠村の自然体系や、森を守る仕事について理解を深める。

③ 地域内外の異校種間連携や交流学習等による新たな学習内容

ア 合同「修学旅行」（村内小学校と合同行事）

ねらい：北海道大学と連携し、留学生と交流する中で、他国のことについて知り、あらためて自分たちの住む占冠村について認識する中で、国際感覚を高め、その理解を深めることができるようにする。

内容：北大教授と留学生より、留学生の母国と占冠村や日本の生活文化や地理を比較した内容の講話を聞いたり、大学内を散策し、留学生と交流を深めたりする。

イ ICTを活用した交流授業 ※TV会議システムを活用した授業

- 前期課程の社会科にて、合同の社会科見学を実施に際して、学習内容の共通理解及び指導
- 合同修学旅行や合同宿泊研修に向けての事前学習及び指導（前期課程、後期課程）
- 国語科（前期課程）において、教材の感想及び意見交流

今までは、交流する学校まで往復2時間という時間をとられていたが、TV会議システムを活用することにより時間を有効に活用できるようになった。また、他校との交流は集合学習のみに限定された活動となっていたが、このシステムを活用することにより、頻りに交流できるようになり、少人数のデメリットであった「思考を深める」「意見をねりあう」場面を設けることが可能となった。

5 今後に向けて

「地域に根ざした学習内容の改善・充実」を図るために、まずは「地域を知ることそして深めること」、積極的に地域に働きかけ、また、耳を傾けることにより、授業のアイデアも広がる。そして全教職員で学校としてどう形作るかを考えることにより、学習内容の改善・充実につながるものとする。